

Interview #04

*2024年3月インタビュー

2024年3月所属：創薬科学研究科 基盤創薬学専攻

(名古屋大学融合フロンティアフェロー／日本学術振興会学振特別研究員)

2024年4月所属：大手製薬会社

<受賞等>

・第11回CSJ化学フェスタ2021 最優秀ポスター発表賞

・2023年度名古屋大学学術奨励賞

・第18回ホームカミングデイ「NAGOYA UNIVERSITY 3 MINUTE COMPETITION」



創薬科学研究科の先輩

これまでやってきた研究の概要を教えてください

簡単に言うと、医薬品を早く安く作れるような手法論の研究です。具体的には、医薬品候補化合物の合成法に焦点を当て、マイクロフロー技術を利用して迅速かつ低コストで生産するデモンストレーションを実施しました。ちなみに、修士では合成寄りの研究をしていましたが、博士課程では機械学習などの統計的手法を意図的に取り入れ、融合研究に挑戦しました

この春からはどういう仕事をする予定ですか？

メディシナルケミストの部門で創薬研究に携わる予定です。製薬業界において、メディシナルケミストとプロセスケミストで就活エントリーが分かれていた場合が多かったと記憶しています。私はずっとプロセスケミスト寄りの研究をしてきましたが、「創薬の過程全体を経験したい」という気持ちがあり、新たな挑戦として、メディシナルケミストの進路を選択しました。

就職するにあたって大事にしたことは何ですか？

中学生の頃から、幼いながらに「新薬を作って人々を救いたい」という夢があり、就活における自己分析で原点に立ち返りました。それと同時に、一年(2007年から2017年の一年間の平均)で30種類程度しか完成しない”ある意味でノーベル賞並みの栄誉”となる新薬開発に挑戦したいと思ったため、製薬会社を選択しました。その中でも、ネームバリューや報酬などの研究環境を考慮し、さらに私は精神系の薬に携わりたかったため、志望企業が絞られていきました。

キャリア形成にあたって活用したこと、在学中に経験してよかったことを教えてください。

企業と博士人材の交流会は、画期的な取り組みだと思います。距離感が近く、企業から実際に声がかかり、見学に行くなどの実際的なチャンスが増えました。また、博士はどうしても研究室の中で内向きになっている傾向がありますが、交流会がきっかけでアピール能力を鍛えることができました。自分のプレゼンに対して、どんな企業がどのように評価するのかによって、自分の研究の適性を掴むきっかけになったのもありがたかったです。

また、大学で開催される企業セミナーにも参加しました。セミナーで業界や企業の大枠理解をしたあと、OBOG訪問により深く内部を知ることができるため、博士にとって大変ありがたい、良くできた仕組みだと感じました。

就職活動で「ここが評価された」と思うことはありますか？

DXが浸透するようになった今の時代だからこそ、機械学習の話をするときは反応が良かったのかもしれませんが、既存の有機合成研究は、ある意味では製薬会社にとっては当たり前になっているので、機械学習を取り入れた融合研究が目新しく、注目されやすかったのはあると思います。その他、チャレンジングな研究をしながらも、成果に繋げてきた総合的なスキルも評価下さっていたらありがたいと思います。余談ではありますが、私が機械学習を取り入れた研究を始めた時は、「その研究にはサイエンスがない」といった指摘をいただくことも多かったです。そのようなご指摘と向き合う中で、自分の研究成果を正しく伝えるスキルを伸ばすことができました。そして、今は就職活動でも「機械学習が使えるか」といった項目があるほどに注目されているため、結果的には良かったのかなと思います。

後輩たちにエールをお願いします。

博士課程にネガティブなイメージを持つ人もいますが、私にとっては2つの側面で大きな価値がありました。ひとつは社会的なメリットです。研究を通して世界とのコネクションを築くためには、やはり学位が重要になってくると思います。もうひとつは個人的なメリットです。自分の興味関心をとことん深く突き詰めていけるのが、博士課程の本質的な価値だと感じています。また、博士課程自体がひとつの学問を究めるような体系になっていますが、博士課程も研究人生レベルで見ればひとつの過程に過ぎないと考えています。常に新しいことに挑戦し、自分のスキルを高めていく意識を持つといいのかもしれない！